
殺し屋と花のような君

条理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋と花のような君

【Nコード】

N4606R

【作者名】

条理

【あらすじ】

これはFuture×Realにつながる(?)話。恋愛恐怖症な婚活女性、人と距離を置く『最強』の殺し屋、自称仙人(?)なツンデレ男子、自他共に認める女たらしな青年、病弱な訳あり家出娘が織り成す、複雑で不思議な恋愛物語(になる予定)。基本不定期掲載。興味のある方は覗いてって下さい。

指令0 こいびと探し

銃声が響く。真夜中の誰も通らない裏路地で。

一人の男と、一人の中年男性が向かい合っていた。中年男性は地べたに尻餅を着いたのを気にすることもなく、顔中鼻水や涙でべたべたにしながら懇願していた。

「たっ、助けてくれえ！！命だけは！かつ、金ならホラ！！沢山あるからさあ！！」

その言葉に男が反応することは無い。代わりにこう思っていた。

（……あなたのことは全く知らない。でも仕事だからここで死んでくれ）

男は引き金を引くことをためらわない。それが仕事だからだ。

銃声が響く。真夜中の誰も通らない裏路地で 人が死んだ。

ここは掛井川市。殺し屋家業と極道の総本山である。

* * * * *
* * * * *

病院の個室の前で、私はどういふ顔をして父に会えばいいのかわからなかった。

先ほどの先生の説明が頭をよぎる。

『お父様の体のほうですが、 これ以上手術をしても病気が治る見込みがありません』

『もし手術をしたとしても、少し延命ができるぐらいです』

手術をすれば治ると、言っていたのに。約束が違う、と先生に問い詰めたかった。

『余命は もって半年です。場合によれば短くなることもありま
す』

半年で親孝行なんて出来るわけがない……。どうして父がこんな目に遭わなければならないのだろう。

でもこんな所で思い悩んでばかりではいられない。私は無理やり笑顔を作って病室のドアを叩いた。返事が聞こえたので、ドアを開けた。

「やあ、みはる。先生は何て言っていたんだい？」

昔はかつこよく見えたお父さんも、今では痩せていて見る影もなかった。私は努めて明るい声で言った。

「手術のおかげで良くなっているんだって。もうすぐ退院できるところだよ」

でもお父さんは、先ほどまでの和やかな雰囲気から一変して、厳しい顔をして言った。

「……みはる。嘘は良くないよ。本当のことを言って欲しい。もう僕は長くないのだろう?」

見破られていた。やはり私の嘘なんてお父さんには分かってしまうんだ。私はお父さんから体を背けていった

「……本当のことなんて言いたくない。お父さんが悲しむのが目に見えているから言わないの」

私は作り笑顔が崩れかけていた。目から涙がこぼれそうだった。お父さんは優しい声で言った。

「みはる、こつちを向いて欲しい。大事な話があるんだ」

私は顔を見られるのが嫌だったけれど、お父さんのほうを向いた。

「やはり、君は優しい子だね。こんな駄目な父親のために泣いてくれるんだから」

お父さんは私を椅子に座るように促すと、私に真っ白いタオルを渡した。顔を近づけると、花の香りがした。それで顔を拭く。

お父さんは私のほうを向くと、優しい声音でこう切り出した。

「みはる。僕はあとどれくらい生きられるんだい?正直に言って欲しいんだ」

私はこれ以上お父さんに嘘をつきたくなかった。だから本当のことを言うことにした。

「……あと半年だ、って先生がおっしゃっていたの」

それを聞くと、お父さんは満足そうに言った。

「半年か……。十分だな。それほど短くなくて安心したよ。これならみはるにお願い事しても大丈夫だろう」

「……お願い事って？」

私は鼻声でお父さんに聞いた。お父さんは笑顔で言った。

「みはるにやって欲しいことがあるんだ。簡単にはいかないが、お願いできるか？」

「お父さんのお願いなら……。やってみる！」

私の言葉を聞いてお父さんは満足そうに頷いてこう言った。

「そうか！ やってくれるか！ 実はな、死ぬ前にどうしてもみはるの花嫁姿が見たいんだ。大事な一人娘である君の結婚式が見てみたいんだ」

けっ、結婚式！？ どうしよう……。私には今恋人すらいないのに！
！軽々しく引き受けるんじゃないか！！

お父さんの言葉に答えかねていると、お父さんは急に悲しそうな顔をして言った。

「……無理なら別にいいんだぞ。ただ君と一緒にバージンロードを

歩いてみたかっただけなんだ。気にしないでくれ」

お父さんの悲しそうな顔を見ていたら、ついこう言っていた。

「大丈夫。心配しないで！！私、必ず素敵な恋人を見つけて結婚して見せるから！！」

言ってしまった後に気が付いた。私の職場出会いないじゃない……！！

こうして私の恋人探しが幕をあけたのであった。

指令1 すけこましをぶん殴れ！

西暦1990年4月8日、午前9時11分。掛井川市霧原町のとあるビルの社長室にて。

そこには二人の男性がいた。一人は恰幅のよい高級そうなスーツを着た頭部が少し寂しくなりかけている中年男性。そしてもう一人はと言うと 金髪の黒いスーツを着た青年だった。

さらさらの金髪、青い切れ長の瞳、よく通った鼻筋、堅く閉ざした口元。女性なら一度は想像するであろう王子様のような美しい青年がそこにはいた。その青年が口を開いた。

「今度こそ私は社長に言いたいことがあります。いい加減私を看板商品として扱うのはやめてほしいのですが」

すると社長と呼ばれた中年男性は悪びれもせず言った。

「クラウドザー、そんなに堅いことは言うな。お前を指名するお客が多くて大変なのは良おく分かる。が、しかしだ。その苦難を乗り越えてこそ一流の殺し屋じゃあないのか？」

「……言わせてもらいますが、私は好き好んで一流の殺し屋になっただけではありません。それに社長の行いで一番迷惑しているのは私なのです。あなたが先方に私を勧めるせいで、ここ最近私の休みはありません。少しは休ませていただだけませんか」

青年 クラウドザーが言うと、社長はこう諭した。

「いいか、クラウドザー。休みは人を墮落させる魔の期間だ。もし俺がお前に今すぐ休みをやったとしよう。お前は休みの間ずっとだらだらごろごろ自室で過ごす。すると、どうだ。銃の腕前が落ち、そのせいで仕事に行く気力も失せ、一生を部屋で過ごしたくなる。そうしたら、お前二ートになるぞ！！だから、忙しくしていたほうがいいんだぞ。分かったか！！」

そう言われると、何も言い返すことができなくなってしまった。仕方ない、もう一仕事終わってからこの人に文句を言おうという気持ちになってしまった。

「……分かりました。もうしばらく働いてからあなたに抗議をすることにします」

肩を落として社長室を出ようとするクラウドザーを呼び止めた。

「クラウドザー、ちょっと来い。いいものを渡してやろう」

社長に近づくと、何やら分厚い茶封筒を渡された。中をのぞくと札束がぎっしりとつまっていた。

「少し給料に色をつけておいた。この調子でがんがん働け！！」

（お金より休みが欲しいけど、満面の笑みを浮かべながらそう言われると何も言い返せない）

そう思ったが、口には出さずお辞儀をして社長室を出て行った。

社長室を出ると一人の青年がクラウドザーを待っていた。その青年は明るめの茶髪に少したれ目の瞳、形の良い鼻、いつも笑みをたたえ

ている口元。全体的にホストクラブなら確実にナンバーワンをとれそうな青年であつた。だが青年が着ているのは派手なスーツではなく、クラウドと同じ黒いスーツであつた。

「遅かつたね、波平。社長に文句は言えたのかな？」

「うまく丸め込まれた。休みどころかもつと働けだ」と

「相変わらず波平には厳しいんだね。おれなんて週3日も休みがあるからね。あんま期待されてないのかも」

「レン、いいなお前は……。はつきり言つて羨ましいぞ」

クラウドはその青年　レンに羨望の眼差しをおくりながら言つた。彼は飄々とした顔で言つた。

「あんまいいつてもんじゃないよ。だって3日も休みがあるんだよ？　どの子に先に会おうか迷うじゃない。紗希ちゃんも捨てがたいし、加奈ちゃんもいいよね。ああつ、でも夕実ちゃんにも会いたいな、つて悩むんだよ。波平には分かる？　このおれの苦惱！」

クラウドは頭の血管が一本切れたような気がした。そんなクラウドの様子などお構いなしにレンは語り続ける。そして最後に一言。

「　　というわけで最近のおれは財布の中が寂しいんだよ。と
いうことだから貧乏なおれにお金貸して」

クラウドは体の調子を確かめた。先ほどまでの疲れが一気に吹き飛んでいる。

この調子なら目の前のすけこましを殴ることもたやすいだろう。

「レン、一発殴らせろ」

その言葉を聞いた瞬間、レンは全速力で階段を駆け下りる。それを追うクラウザー。

今日も元気に二人の追いかっこが始まったのであった。

指令2 婚活せよ！／皮肉屋の相手をせよ！

西暦1990年4月8日、午後7時10分。掛井川市瀧沢町のとある保育園にて。

昨日はお父さんの月一回の検診なので仕事を休んでしまったが、さすがに今日は休む訳にもいかなかったので出勤した。私の職業は保母さんなのだ。

私が勤めるもりやま保育園は何と勤めている人が全員女性という、ある意味樂園のような場所である。昨日休んでしまい迷惑をかけてしまったはずなのに、園長先生はお家の都合なら仕方がないから気にしないでと言われてしまった。思わず涙腺が緩みそうになってしまった。本当に私にはもったいない勤務場所である。

そして今日の仕事を終えた私は、思い切って園長先生に相談してみることにした。

海よりも広い心を持っていそうな園長先生に相談すれば、きっといい考えが浮かぶに違いない！そう思った私はちょうど仕事が終わったらしい園長先生に声をかけた。

「園長先生、お疲れ様です。あの……少しお時間よろしいですか？聞いて欲しいことがあるんです」

すると園長先生は、笑顔で答えてくれた。

「お疲れ様、みはるちゃん。今日は特に何もないから別にいいけれど……。私なんかが聞いても大丈夫？」

自信がなさそうに言う園長先生に、私は真剣に言った。

「ぜひ園長先生に聞いて欲しいんです。お願いします!」

すると園長先生は。

「分かったわ。私で良ければ何でも聞くわよ」

そう言うてくださったので、私は園長先生に事の顛末を話したのである。

* * * * *
* * * * *

「つまりみはるちゃんは、大事なお父様に花嫁姿を見せてあげたいけれど現在あなたには結婚できるような相手がいないということなのね……。難しい問題ねえ」

「そうなんです……。園長先生、私どうしたらいいのかわかんないんです。何かいい知恵はありませんか?」

そう言う園長先生は、難しい顔をしながら言った。

「私の意見なんだけど、やっぱり結婚はままごとじゃないから、慎重に決めたほうが上手くいくと思うの。みはるちゃん、焦って決めちゃうと後で後悔すると思うわ!時間がないのは分かるけれど、慎重に決めなさい」

「慎重に決めるって、どうやって？」

そう言うのと園長先生は、意外なことを言った。

「とりあえず、前の彼氏に会ってみれば？恋する気持ちを思い出せるかもしれないわ！」

前の彼氏か……。あの人に会うのちょっと恐いなあ。

そう思ったけれど、園長先生の言葉を信じてみることにした。

こうして私の結婚活動　略して婚活が本格的に幕を開けたのである。

* * * * *
* * * * *

同日、同時刻。仕事が終わって、会社に帰る途中にて。

私はレンに一発かましたのち、仕事を片付けて会社に戻る途中であった。

「……全くレンの女好きには困ったものだ。聞かされるこっちの身にもなってもらいたい」

なんて独り言を呟っていたら。

「へえ、相変わらずレンは女を泣かせているのか。興味深いな」

聞きなれた男の声がした。もしかしてと思い、あたりを見回すと奴はいた。

「そして、お前も相変わらずだな。伊波^{いなみ} 珪蔵^{けいぞう}。俺を探すなんて、お前もまだまだ修行がなっていない。レンのことを言えないな」

年齢17歳ぐらい。漆黒の短く刈った髪、見る人によって印象が大きく異なる笑みを顔に貼り付けているその少年は、背中に大きなリュックを背負っていた。

「……久しぶりだな、藤島^{ふじしま} 才^{さい}。旅の感想をお聞かせ願えないかな？」

私が勝負で一番勝てるかどうか分からない知り合い 才が目の前にいた。

指令3 皮肉屋の昔話を聞け！

西暦1990年4月8日、午後7時12分。掛井川市霧原のとある裏路地にて。

普段なら誰も通ることのない、この薄暗く狭い道に二人の人物がいた。一人は伊波^{いなみ} 珪蔵^{けいぞう}、またの名を殺し屋クラウザーと呼ばれている金髪の美しい青年。

そしてもう一人は漆黒の短く刈った髪に、見る人によって大きく印象が変わる笑みを顔に貼り付けている藤島^{ふじしま} 才^{さい}と呼ばれた少年だった。

伊波は彼を見て、こう思っていた。相変わらず読めない男だ、と。そんな飄々とした彼の様子を警戒しながら見ていると、藤島が唐突に口を開いた。

「なあ、伊波。俺の昔話が聞きたいか？」

それを聞いて、伊波は心の中で呆れてしまった。そして思った。

（また、”アレ”が始まるのか……）

そう思う伊波の様子を気にすることもなく、彼は語り始めた。遠い昔の話を。

* * * * *

あれは周りが騒がしくなっていた頃だったな。ちょうど異国から黒船が来た頃だった。

俺は病で両親を亡くしてしまったんだ。悲しみに浸ることもあったが、いつまでもそうしている訳にもいかない。俺は一人でも生きていくために漁師になることにした。

幸い両親はまともな船を形見に残してくれたし、俺も小さな頃から父親の船に乗せてもらって漁を見ていたから、同じ仕事をこなすのにそんなに時間はかからなかった。

その日はとてつもなくいい天気だった。絶好の仕事日和だったから、俺は数人の漁師仲間と協力して漁を行った。だが俺だけはあまり魚を取る事が出来なかった。

悔しい気持ちで岸に上がると、別の穴場で漁をしていた仲間が何やら酒盛りをしていた。

手招きされたから、その場に行つて見ると美味しそうな刺身がそいつの前にあった。

”今日は珍しい魚が釣れたんだ。刺身してみたらえらく美味くな。お前も食べるか？”

そう言われて俺はその刺身に興味がわいた。そいつに言われるがままその刺身を食べてみた。その味が、とてつもなく美味かった。普通刺身には醤油とか塩とかつけるが、その刺身はそのままで十分に美味かったんだ。天と地がひっくり返るような、そんな美味さだった。

俺は、あとからやって来た仲間と一緒にそいつと酒盛りをした。さつき魚が取れなかったことなんてどうでも良かった。そいつらと昼

間から酒を飲んで料理を食って騒ぎまくった。 その日が俺の間としての最期の日だった。

その日から俺は死なくなってしまうたんだ。

* * * * *
* * * * *

「 と言う訳だ。つまり俺は不死身なんだな」

「……はつきり言おう。お前の昔話を聞くのはこれで20回目だ。もういい加減飽きた」

私は自慢げに昔話を話す才に不満を言った。すると才は悪びれる素振りもなく言った。

「お前は全く馬鹿だな、伊波。お前に昔話を聞かせるのは確かに20回目だが、今までの話とは微妙に語り口が変わっているのに気が付かないのか。本当にお前は大馬鹿者だよ」

今までの語り口とは微妙に変わっているのは気が付いていたが、そんな些細な変化で違うと言い張るこいつは何て奴だ。無茶苦茶な男だ。馬鹿はそっちじゃないか。

なんて思っていたのだが、口に出すのはやめておく。才は続けざまにいった。

「お前今気が付いたけど、少し雰囲気が変わったな。前髪をピンで

留めているし、眼鏡をかけているな。そんなに視力悪くないだろ？
似合わないから止めておけ」

何でお前に髪型や眼鏡のことを言われるんだ、と一瞬苛立ちを隠せ
なかった。

すかさず才は私のことを攻め立てる。

「今少し怒っただろ。やっぱりお前は昔のままだ。無鉄砲で何にも
考えてなかったあの頃と全く変わっていない。しかし話していて気
が付いたが、お話し方まで変えて何考えてるんだ？大幅なイメー
ジチェンジか？やっぱり」あのときの事”を気にして」

「黙れ。喋るな」

私は才の頭に拳銃を突きつけていた。才はあの笑みを顔に貼り付け
ながら言った。

「撃ちたかったら撃てばいい。俺は何度でも」

三発の銃声が響いた。彼は脳を撃たれて死んだ。はずだった。

「……痛ってえな。少しは手加減しろよ、伊波」

彼は死んでいなかった。撃たれた箇所を手で押さえている。

「やはりお前は”死なない”か。これではいくらやっても勝敗はつ
かない」

私はその場を立ち去ろうとする。が、才もついて来た。

「何でついて来る？」

俺は歩きながら才のほうを向いて問うた。才はあの笑み　寂しそうな顔をして答えた。

「……伊波が寂しそうだから。あと旅の連れと喧嘩してむしゃくしやしてた。だからお前に八つ当たりした。悪かったな」

珍しく謝ってきた。私は許すことにした。

「私も撃ってしまって、悪かった。すまない」

そう言くと、才は態度を変えて偉そうにしながら言った。

「まあ、許してやらなくもない。それと……前髪も眼鏡もそれほど似合わなくもない」

偉そうに言いながらも私のことを気にしていた彼を見て、思わず笑ってしまった。

そんなことを言いながら、私達は誰も通らない裏道を通っていった。

指令4 旅は道連れ、でも喧嘩

西暦1990年4月8日、午後7時30分。会社までの帰り道にて。

私は、才になぜ旅の連れ
永瀬^{ながせ} 来華^{らいか}さんと喧嘩をしたのかを詳しく聞いてみることにした。普段喧嘩を吹っかけるような話し方をする彼が、唯一壊れ物のように大事にしている相手なのだ。喧嘩する要素が見つからない。私は喧嘩の内容に、少し興味があった。

「何で来華さんと口喧嘩なんてしたんだ？お前と彼女、すごく仲が良かったじゃないか」

私は、才に問うた。すると才はあからさまに不機嫌になった。

「あいつ、俺の気持ちをまったく分かってなかったんだ。しばらくは顔も見たくない……」

そう言うと、才は黙り込んでしまった。不老不死もふて腐れることがあるのかと、少し驚く。この調子では、才と彼女の関係が壊れかねない。しかし私は男女間の揉め事はつきり言ってよく分からないので、あのすけこましに話を聞いてもらうしかないだろう。

「……オ、レンと話してみろ。きっと良い案が浮かぶぞ」

そう言うと、才は私のほうを向いて言った。

「そうだな。大馬鹿者のお前には分からないもんな。俺の気持ちなんて」

……へこんでいても、憎まれ口は通常営業なのか。私は怒りを通り越して呆れてしまった。私達は暗くじめじめした道を、そんなことを喋りながら進んだ。

* * * * *
* * *

同日、同時刻。保育園から家までの帰り道にて。

私は少し怖い気持ちもあったけれど、前の彼氏に会ってみようと思しながら、家路を急いでいた。私の家は閑静な住宅地の中にあるのだが、最近不審者が出る事件が多いので、なるべく早く帰ろうと思い自転車を漕いでいた。

そうしている内に家の玄関が見えてきて、一安心した。だがしかし、家の前に何やら怪しげな人影を見つけてしまった！！私は不審者なのかと思い、ゆっくり自転車を進ませる。

すると不審者はこちらのほうに気づくと、走って近づいてきた……！！

（ふっ、不審者！？早く逃げないと！！）

そう思って、自転車を方向変換しようとしたとき。

「みはる、久しぶりなのに逃げようとししないでよ」

聞きなれた声がした。振り返って近づいて見ると、懐かしい顔がそ

ここにいた。

「来華！？何でここにいるのー！」

「家に帰りづらくて、みはるの家に来ちゃった。久しぶりねえ」

私の高校時代の友達、永瀬 来華がそこにはいた。

* * * * *
* * *

同日、午後7時36分。浅庭家リビングにて。

久しぶりに再会した親友は、あまり変わっていなかった。ただ昔は髪を腰まで伸ばしていたけれど、今はバツサリと切ってショートヘアになっている。最後に会ったときは何か思いつめているような雰囲気だったけれど、今はそんなこともないようだった。

長袖Tシャツにジーンズというシンプルな格好の彼女 来華は、ソファに座ってあたりを見回していた。

「みはるも、この家も全然変わってないねえ。本当に懐かしいな」

来華はそんなことを言っていた。彼女は確か高校二年のときに、退学届けを学校に提出して、彼女の恩人と一緒に旅をしていたはずだったんだけど。

私はテーブルに彼女と私の分のお茶を出した。彼女は美味しそうにそれを口に含む。

「ねえ、来華。今まで旅をしていたみたいだけど、どうして帰ってきたの？あなたの恩人さんは一緒じゃないの？」

私が彼女にそう質問すると、彼女はあからさまに元気が無くなった。

「サイ君は、私を縛りすぎる。私の気持ちなんて分かってくれないんだもん……」

どうやら彼女の恩人の名前は”サイ君”というらしかった。そして彼女はそのまま黙り込んでしまった。多分喧嘩をしてしまったのかな、と私はぼんやりと思った。とりあえず私が彼女にすることは、部屋を貸し与えることだ。

「来華。しばらく家で生活しない？私も今一人暮らしで寂しいし、部屋なら一杯あるから」

そう言う彼女は、少し考えた後首を縦に振って言った。

「ありがとう、みはる。やっぱりあなたってお人好しなんだね」

寂しかった私の生活が、少しにぎやかになる予感がした。

指令5 期待と、裏切り

俺は時間に取り残されてしまった人間だ。……………いや最早人間と呼べるのかさえ怪しい生物だと思っている。だから俺は自分を名乗るときに”ある自己紹介”をする。

『自分は”不老不死の仙人”である』、と。

長い年月を生きてきて、長い間考えてきた自己紹介の中でもトップクラスの分かりやすさである。自分でも気に入っている。この自己紹介を聞いた奴等の返す反応の大半は、馬鹿にするか、真面目に信じるか、証拠を見せると騒ぎ立てるか、の三種類である。

だからアイツと始めて会ったときは、驚きを隠せなかったのをよく覚えている。

金髪碧眼のハリウッド俳優みたいな顔をしたアイツは、俺の自己紹介を聞いた瞬間、顔色一つ変えずにこう言ってきたのだ。

『……………それがどうした？その何が偉いんだ？』

衝撃だった！！俺の自己紹介を馬鹿にするでもなく、真面目に信じるわけでもなく、証拠を見せると騒ぎ立てるわけでもなく、アイツは涼しい顔で俺の自己紹介を軽くあしらったのだ……………！！

俺はアイツに強い興味と期待を持った。だが、そんな俺の思いは無残にも崩れ去ることになった。八年ぶりに会ったアイツ　伊波は、あの頃とは比べ物にならないほどツマライ奴になっていた。

……なあ。俺の持った興味と期待は、どこに置いていけばいいんだ？ただの”無鉄砲馬鹿”から”頭の使える馬鹿”になったお前に、俺は何を期待していたんだ？

やっぱり俺は、お前が、大嫌いだよ。伊波 珪蔵。

俺は、前を歩いている金髪碧眼の殺し屋の背中を見ながら、そんなことを思った。

* * * * *
* * *

西暦1990年4月8日、午後8時11分。掛井川市霧原のビジネス街通りの一角にて。

細い路地を右へ左へと歩いていくと、見慣れた霧原のビジネス街の風景が目飛び込んできた。残業を終えて帰宅するサラリーマンやOLの姿が、ちらほらと見えている。それと同時に、同業者や似たような仕事をしている人間なら、一目で分かる不自然なスーツ姿の人間達もちらほらと見えていた。

「……極道だな。隠しているつもりだろうけど、肩に怪我している。多分、ドンパチやったときに流れ弾が当たったのか？」

隣では、先ほど通りを通っていったガタイのいい男の職業を、推理している才がいた。

私は、そんな才に正解を告げる。

「最近、寺田組と住吉会の抗争が激化していてな。多分どちらかの組の所属じゃないか？」

私がそう言つと、才は私を一睨みして、吐き捨てるように言った。

「別にお前に聞いていないよ、伊波。それともアレか？」自分何でも知っていますよ”的な自慢か？……うつとおしいんだよ。独り言か、他人に話しかけているかの区別ぐらい分かるだろ？　　だからお前は大馬鹿者なんだよ。八年も経っているのに、そんな事も分らないオコサマじゃあないよなあ？」

……私はこいつに何か嫌がらせでもしたか？はつきり言つて、何でこいつが怒っているのが全く分からない。これは本気出しても、怒られないよな。でもなあ、通行人の目もあるし、ここでビルの一つでも壊れたら困るだろう。　　よし、ここで怒るのは止めよう。

私は自分の感情に強く強く蓋をし、さらに頑丈な南京錠を三つほど心の扉に取り付けた。

私は涼しい顔をし、顔に笑みを貼り付けて、極めて何でもないかのように才に言った。

「さて、こんな所で立ち話をしているのもなんだから、早く会社に戻ろう。私も早く社長に報告をして家に帰りたいし、お前だってレンに相談したいことがあるだろう？さあ、早く会社に戻らなければ」

そう一気に言つと私はスタスタと歩き始めた。ここから会社まで五分もかからない。さつさと社長に報告を済ませて、家に帰って飯食つて寝よう。こいつはレンに押し付けよう。きつとレンなら才のことも甲斐甲斐しく面倒を見てくれるだろう。

そう思っていた瞬間、後ろから殺気が飛んできた。後ろを振り返ると、不機嫌度MAXの才君の姿があった。

「ちよつと待て、伊波。お前、今”面倒臭えヤツ”とか思ってただろ？俺は仙人だからお前の思っていることなんてお見通しなんだよ。久々に再会して俺が優しくしてやってれば、お前のその態度は一体何？お前は、俺が何で怒っているのか全っ然分かってないだろ。

俺はお前のその何でもないように振舞ってる、その態度が気に入らないんだよ！

怒りたきや怒りやあいじやねえか！何我慢してんだよ伊波 珪蔵
！！トイレ我慢してるような顔してんじやねえよ！！この
野郎！！」

頭の血管が一本プチンと切れた。眼鏡を外してスーツの胸ポケットに入れる。体の調子をよく確かめる。先ほどの疲れが一気に吹き飛んでいる。これなら目の前にいる皮肉屋を殺すこともカンタンだ。俺は思っていることを全て曝け出した。

「……………人が黙って聞いてりやあ、何だその口の利き方は？俺だつてなあ、好きで感情を我慢してねえんだよ、この人気取りの糞野郎がつ！！いきなり目の前に現れていきなり偉そうな口利かれてこつちだつて迷惑なんだよ！！何が”優しくしてやってる”だ。偉そうに自慢してる独りよがりの自己中野郎のくせに、この殺し屋クラウザーに偉そうな口利いてんじやねえぞ、この振られ虫！！」

言った瞬間ヤベエと思った。目の前にいる藤島が思いっきり怒っていることがよく分かった。が、引くわけにはいかない。才は無言で拳を構えた。あれは本気モードだとすぐに分かる。俺もスーツの上着のポケットから愛用の拳銃を取り出す。一触即発の雰囲気は周り

に流れる。俺が拳銃の引き金を引き、才が拳を振り上げながら突進してきた。

その時、俺と才の目の前を塞ぐヤツが現れた。ヤツはすばやい動きで、俺と才の間に割って入り、俺の喉元にモップの柄を寸止めで突き出し、才のほうには黄色いヘルメットを突き出し、俺たちの攻撃を止めた。そして一言大きな声で集まってきたギャラリーに言った。

「これにて、劇団狸座路上公演”期待と、裏切りの友情”を終了いたします！皆様盛大な拍手を！！そして良ければこの青いバケツに、皆様のお気持ちをに入れていただけると嬉しいですよ！どうもありがとうございました！」

ヤツ　　レンはギャラリーの目の前に青いバケツを置き、恭しくお辞儀をした。その行動に言葉に釣られ拍手する者や、お金を入れる者が後を絶たなかった。俺と、才は気まずくそこに突っ立っていることしか出来なかった。

* * * * *
* * *

「うつひょう！一万円札まで入ってる。ちょうど金欠だったから助かったよ」

レンは回収したバケツの中身を見ながら、私達にそう言ってきた。私は目の前を歩いている黒いツナギ（バックに”死体命！”と男らしい筆文字で書いてある）を着ているレンに問うた。

「何であそこにいた？それにその姿　死体処理班の制服着て何やつてるんだ？」

するとレンは質問に質問で返してきた。

「それよりも！何で藤君がここにいるのかが不思議でしょうがないんだよね。ねえ、波平。藤君とどこで合流したの？それに何で藤君と喧嘩していたの？色々と聞きたいことが満載だよ」

レンは私たちの遙か後ろにいる才に、語りかけるように言った。才はあれから一回も口を開いていない。その様子を見て、レンはやれやれと言うようなジェスチャーをした。

「まあ、話は中で聞かせてもらおうかな。その方が色々良さそうだよ」

そうして私達三人は、薄汚いビルこと”殺し屋・死体処理人派遣会社 丸六”の前へと到着した。これからどんなことを聞かれるか、不安で胸が一杯だった。

指令6 自己中仙人とすけこまし

西暦1990年4月9日、午後8時22分。掛井川市霧原にある”殺し屋・死体処理人派遣会社 丸六”社長室にて。

「 以上で、任務を遂行しましたことを、ご報告いたします」

金髪碧眼の殺し屋クラウドは、重厚な作りの木の机を挟んで座っている、中年男性。社長に報告書を提出しながら、そう言った。社長は「ご苦労さん」と言いながら、クラウドが提出した報告書に目を通していた。一通り報告書を読み終えた社長は、顔を上げてじつとクラウドの目を見た。

「任務の方は、よく分かった。それで、だ。俺に何か言わなきゃいけないことは無いか、クラウド？」

社長は顔に笑顔を張り付けながら、問いかけた。だが目は全く笑っていない。

それを見て、背中に冷や汗が滲むのを、はつきりと自覚できた。緊張した空気が二人の間に漂う。その時、後ろからその空気をぶち壊すような明るい声が、二人の間を割って入って来た。

「ハイ、先生！クラウド君は公衆の面前で、ドンパチをしようとしていましたー！でも、悪気は無いと思うので、許してあげてくださいーい！」

黒ツナギの男。レンは、ふざけた様子でクラウドの隣に立って、にこにことした顔でそう言った。

レンのその顔を見た社長は、やれやれと言うようなジェスチャーを

した。そして本来の笑顔になると、レンとクラウドを交互に見ながら、こう言った。

「……全くお前達は、仲が良いな。クラウド、今回はレンに免じて許そう。だが、次からは相応の処分を受けてもらうからな。気を付けるように」

その言葉を聞いたレンはニヤツと口角を上げて、クラウドにウィンクした。

その顔を見て、クラウドは口パクで、レンに言った。

『ありがとう、助かったよ。感謝してる』

それを見て、レンは少しカッコいいどや顔をした。社長は提出書類にボールペンで色々と書き込んだあと、二人に向かって無言で手のひらを振った。

”出て行け”の合図だ。二人は合図を見ると、社長に静かに一礼をし、社長室を後にした。

* * * * *

同日、午後8時25分。 ”殺し屋・死体処理人派遣会社 丸六” 多目的スペースにて。

おれは相棒に飲み物を買ってこさせる雑用を押し付けた後、”彼”
から話を聞く為に、その姿を探していた。”多目的スペース”なんておしゃれな名前が付いているこのフロアは、はつきり言って一般

企業の食堂と同じような内装である。そして使用目的も煙草を吸ったり、ご飯を食べたりと食堂と何ら変わらないのだった。

（……何で、むさ苦しい野郎共ばかりなのかねえ。可愛い女の子が一人はいれば、場も華やぐのに）

そんなことを考えていると、”彼”の姿を発見した。

眉間にしわを寄せて、オレンジジュースを飲んでいる”彼”は、おれの方を見ると、かなり不機嫌な顔になった。おれは”彼”に手を振って、その席に腰掛けた。

「やあ！待たせてごめんね、藤君　ここのジュースあんま美味しくないけど、大丈夫？今、波平に飲み物買ってこさせてるから、おれが君の相手をするよ。どうぞ、お手柔らかに頼むよ？」

おれは一気に喋ると、”彼”こと藤君の顔色を伺った。藤君は、不機嫌な顔でオレンジジュースを飲み終えると、おれの顔を見て言った。

「……ジュースが不味いのは許せる。だが、人の真剣勝負に水を指すような無粋な真似は、正直不快なんだよ。　　嘉銘かめい　蓮司れんじ」

「なははっ、ごめんね。でもさ、藤君があそこで死んだら余計大事になってたからさあ。横やり入れさせてもらっちゃった　まあ、今回はおれの顔に免じて許して、ねっ！この通り！」

おれは両手を合わせて、謝ってみた。しかし、藤君の不機嫌は直らなかつたようで、空いたグラスを音を立ててテーブルに置いた。そしておれを睨み付けながら、文句を言い始めた。おれは耳に透明なイ

ヤホンを装・着！馬耳東風を念仏のように心の中で唱え続ける。彼が言った内容を要約すると、大体こんな感じになると思う。

「お前な、おれがそんな謝り方で許すと思ってんのか？ああ！？（中略）お前は昔からそうだ。何でも”笑っていれば許してくれる”、って思ってる節がある。仙人の俺から言わせてもらうと、お前のそういう所が嫌いなんだよ！！（中略）ふざけてんじゃねえぞ、この腐れ　　野郎！！（中略）ちよつとは俺を敬いやがれ、この人類最低辺の愚民がぁ！！」

………聞いている内に気が滅入ってしまった。おれは、あらかじめグラスに汲んでいた水に口をつけた。グラスに氷が当たる。カラッ、と軽快な音が鳴る。冷たい水が、体の隅々まで行き届いていく気がする。

冷たい水を喉に流し込むと、思考がクリアーになってくる。色々と面倒くさい気がしてきた。　　さて、旧友の愚痴を聞くのもつらくなってきた。そろそろ反撃に出るとしよう。おれは閉じていた口を、開いた。

『藤君。君、面倒くさい』

「……はあっ！？お前に面倒くさいって言われたくないわっ！！！！」

おれの一言に、藤君が食い付いた。　　このまま”コツチ”へ誘い込め。

おれは彼に追い討ちをかけるべく、矢継ぎ早に言葉を積み掛ける。

「だって、そうじゃん。言いたいことは沢山あるかもけどさあ、要点押さえようよ。ただ威張り散らして、文句言つて、キョーセイ的に従わせるなんて、幼稚園児でも出来るよ。」不老不死の仙人「がすることでは無いと思うなあ。おれのお祖母ちゃんは、言つてたよ。」本当に偉い人は、謙虚な姿勢でいるものだ。威張っている人は、本当に偉い人ではない」つて。藤君は、どっちなの？前者？それとも、後者？もちろん前者に決まっているよねえ。だつて仙人なんだから。それ位当然だよ。……あれ、顔が青白いけど大丈夫？もしかして、貧血だつたりする？」

おれが矢継ぎ早に思つたことを言つと、彼の顔が見る見るうちに青白くなつた。少し苛めすぎたようであつた。おれは軽く手を叩く。すると彼は寝起きの小学生みたいに、体がビクツ、つてなる。この瞬間が、おれは大好きである。

眠りから覚めた藤君は、息を荒げている。顔は真っ青で、額には冷や汗が浮かんでいる。

その形相で、おれに聞いてきた。

「……………お前、今何した？」

その答えを、おれは笑顔で

はぐらかす。

「べつつにー。何にもしてないよ。もしかして、藤君。純真無垢なおれを疑う気？疑われて、レン君悲しいぞっ！」

おれの言葉を聞いて、藤君は呆れ果てた様子で言つた。

「お前、気色悪いわ……。八年経つとこんなに変わるものなのか？（悪い意味で）」

「そうよ！八年経つとこんなに変わるのよ！凄いでしょ！（良い意味で）」

そんな傍から見ると馬鹿っぽいやり取りを二人でしていると

フロアーの雰囲気が変わったのが分かった。”最強の殺し屋”の登場であった。

指令6 自己中仙人とすけこまし（後書き）

やっと六話目をあげる事が出来ました……。お待ちせして誠にすみません。今から大海原にダイブします！どなたも私の邪魔はしないで下さい……！

と言うのは冗談です（笑）。まあ半分本気ですが、実行はしません。豆腐メンタルなので（苦笑）。

恋愛のはずなのに全くその要素が出ていないことをお許し下さい。次回はみはるさんを登場させます。ライカも出します。期待して下下さい！

あと誠に身勝手なお願いですが、良かったら本作の感想を下さい（必死）！例え罵りでもポジティブに受け止めて見せます！！優しい読者様が感想をくださることを切に祈りつつ、次話になる早で書きたいと思います。それまで見放さないで下さい！
以上、夏ばてで鰻が死ぬほど食べたい条理でした。

番外編 それぞれの夜 (前書き)

ネタバレ含みます。ご注意ください。
読まなくてもあまり差し支えありません。

番外編 それぞれの夜

先ほどから心臓の鼓動がひどくうるさく感じる。手の平には汗が滲んでいる。多分顔は多少赤くなっているであろう。自分の腰の辺りを見ると、愛しの彼女が体に頬擦りしている。そして私の体には彼女の両腕でがっちりとホールドされている。何やら柔らかい二つの感触があるが、気のせいだと自分に言い聞かせる。これは現実だ。こんなリアルな夢があつてたまるか。もしこれが夢だったら、起きた瞬間に枕元の目覚まし時計を容赦なく叩き潰しているであろう。そのついでに隣の部屋で寝息を立てている相棒を叩き起すことも勿論忘れない。

なぜこんなことを長々と語っているのかと言うと、私にとってまさしく夢のような、しかし現実の出来事が、今現在起こっているからだ。今私が居るのは彼女の家。ここはその家のリビング。

彼女　みはるは家に帰ってくるなり、ずっと私に抱き付いているのである。

「はあゝ、やっぱり珪ちゃんにくつついてると落ち着く」

「……そう言ってもらえると嬉しいが、私の方は落ち着かないんだ。名残惜しいが離れてくれないか？」

私はそう彼女に丁寧をお願いした。すると彼女は愛らしい唇を尖らせて、上目遣いで私を見ながら、甘えた声でこう抗議してきた。

「珪ちゃん。私のこと、大好きなんですよ？こうやってくつつかれるの本当は嬉しいんですよ？……それとも私への愛は無いって言う

の？私のこと嫌いになっちゃったの？」

潤んだ瞳でそう言われると何も反論できない。私は「別にそういう事ではないんだ」と言った。その言葉を聞くと彼女は、先ほどとは打って変わって満面の笑みで、自信満々でこう言った。

「ほら、やっぱり嬉しいんじゃない。離れる、だなんて言うから私のこと嫌いになったかな、って思っちゃったじゃないの。　　今後はそう言う誤解の招くような発言はお互い控えて行かないとね。じゃないと喧嘩が絶えないギスギスした関係になっちゃうからね。気を付けてね、珪ちゃん」

そう言う彼女の後ろには悪魔の羽と尻尾が生えている　　ように見える。これが小悪魔というもののなのか……。前にレンが「小悪魔気質な娘こって色々可愛いよね」などと言っていたが、確かに可愛いのかもれない。が、はつきり言って話の主導権を握らないと、逆にこちらが不利になる。あとで私からアイツに小悪魔に対する認識の甘さを教えておかねば。さもないと、今度はアイツが苦労させられることになる。

そんなことを考えていると、小悪魔な彼女は耳を疑いたくなるような発言をした……………！！

「じゃあこのままお風呂、一緒に入っちゃおっか」

その後、私が全力で彼女を体から引き剥がしたのは言うまでもない。

* * * * *
* * *

現在地、最近巷で評判の喫茶店” c a f e あめのひ”。ペンションをモチーフとしたお洒落な店内は、今はあたしと”彼”を含む数人のお客しかいなかった。あたしはこの従業員として働いているのだが、ちょうど仕事終わりに”彼”が訪ねてきた。そして現在あたしと”彼”は角の席で向かい合わせで座っていた。”彼”こと藤島才君は、この店の人気メニューであるチョコ克蘭チパフェに手を付けず、あたしにこう話を切り出してきた。

「……………来華。体調はどうなんだ？風邪引いてないか？」

「真剣な顔してるから何かと思ったら、いきなりあたしの心配をするなんて……。やっぱりサイ君は過保護だね」

笑いながらそう言うと、彼は「笑い事じゃないんだ」と真剣な顔を崩さなかった。あたしは彼を安心させる為に「大丈夫だよ」と言った。その言葉を聞いて彼は安心したようだった。

あたしはパフェを指差し「早く食べないと溶けちゃうよ？」と言った。すると彼は珍しく慌ててパフェを食べ始めた。どうやら余程あたしのことを心配してくれていたみたいだった。彼の口に付いていたチョコクリームをナフキンで拭いてあげると、彼は子ども扱いすると言った。少し幸せな気分になった夜であった。

番外編 それぞれの夜（後書き）

掲載がかなり遅れて申し訳ありません。前回なる早で書くと言っていた自分を激しくポカポカしたいです！本当にごめんなさい（涙）

本編を書くこうとしていたら、何故かキャラ達がイチャイチャしていました。

次回は必ず本編を書きますのでお許しください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4606r/>

殺し屋と花のような君

2011年11月11日12時07分発行